幽玄回廊

零/Rey

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幽玄回廊

【Ｎコード】
Ｎ０６３７Ｘ

【作者名】
零／Ｒｅｙ

【あらすじ】
エミグレ文書を使ってアリスを復活させようとした後、悪夢に悩まされるウル。彼は悪夢を見ないために睡眠を拒否するという手段を取る。日に日に弱っていく彼を心配した仲間たちは彼を強制的に眠らせたのはいいが…

過去にコピー本出だしたものの再録です。

壱章　禁忌

ウェールズのはずれにある崖の先端に、かつて政治的策略によって敗れた罪のない者達を一生投獄しておく呪われた修道院の跡地があった。怨念漂うその場所は、忌み嫌われる場所としてだれも住もうとはしないところであるにもかかわらず、一人の老人が住居を構えていた。その老人は、ヴァチカンの秘術を自らに使い不死となった魔術師で無限となった自分の時間を有効に使って多種多様の研究をしてきていた。そんな世捨て人のような老人と異能の力を持った青年が知り合ったきっかけは、ヴァチカンの禁術書を悪用しようとした人間を止めるためだった。それからというもの、彼にとって老人は知識を教えてくれるよき師であり、仲間でもあった。

それから半年が経ち、彼等が再会したとき、青年は、前の戦いの仲間であり、彼女であった女性を亡くし、自らも二度と解くことが出来ない、という呪いをかけられていた。老人はそんな彼に自らが作った飛行船を貸し与えたり、年齢を重ねた者としていろいろとアドバイスをしていた。

その老人が、青年にある一言を囁いた。

――――亡くなった彼女をよみがえらせる気はないか、と

青年は世の中の理を外れた事を言う老人の言葉に、何故か普通に信じようと言う気分になったのか、今度の戦いで得た仲間達とウェールズに飛び、老人に促されるがままに彼の家の地下にある一室に入っていった。

常人には理解不可能な機械が山と積んである部屋の一角に、彼は、老人に指示されたとおり、先日エリザベス女王ゆかりの聖地で取ってきた月晶石をまるで壊れ物を扱うかのように慎重に置いた。そして、ゆっくりと視線を動かし、石の上にある透明な液体の入った培養タンクのような物を見つめた。ポコポコと細かな泡が立っているその物体をじっと見つめる彼の表情が薄暗い部屋を反映してか、ガ

ラス面がまるで鏡のようになって映し出されていた。その表情は、普段のある意味投げやりとも言えるやる気なさげなものとは一転して、真剣そのものでだれも寄せ付けない、と言わんばかりの空気を纏っていた。元々通常の人なら持ち得ない異能者故の彼の真紅の両目がより一層その雰囲気を際だたせていた。

「まだ何もしていないうちからそんなに気を張りつめてどうするんですか、ウル」

その場の緊張感とは全く正反対とも言えるのほほんとした老人の声に、ウルと呼ばれた青年は弾かれたように振り向いた。まるでミイラのようにひからびた風貌を持っているのにも関わらず目だけは少年のように輝いている老人はひょこひょことウルのそばに近寄ると、彼の背中を安心させるような感じでぽんぽんと叩いて言った。

「大丈夫ですよ、加藤特佐が亡くなった思い人の復活を成功させているんです。貴方の思いはそれ以上なんでしょう？」

「…ああ」

控えめながらも力強く頷くウルの言葉に満足したように老人は、いくつかの機械を作動させていた。そして彼は、ウルがいる場所に歩いて彼の目の前に手を差し出した。

「アリスさんのＤＮＡ、つまり彼女の身体の一部は持ってないですか？」

その言葉に促されるように、ウルはウエストバックに手を掛けた。大事に包まれた紙の中からは幾筋かの銀髪が乗っていた。老人はピンセットで慎重に銀髪を一筋取ると、それを培養器の中に入れた。老人のしまって良い、と言うジェスチャーに従うようにウルは手の上にあった銀髪を大事そうに紙に包み、ウエストバッグにしまった。培養器のおいてある場所から移動して、再びいろいろなランプが点滅する機械を操作する老人の背中にウルは不安混じりの声で問いかけた。

「なあ…本当に…大丈夫、なのか？禁断の秘術、だろ？」

その声に老人はくるりとウルの方を振り向くと、自分の胸に手を

当てていった。
「私を誰だと思っているのです？ロジャー・ベーコンですよ。エミグレ文書を転記したのはこの私、と言うことは、一番この文書の中身を把握しているのもこの私にしか他なりません」
ロジャーと名乗った老人は、そうきっぱりと言い切ると、再び機械を操作し始めた。月晶石の光を乱反射して七色に淡く輝きながら泡が立ちこめる水槽を見つめるウルは自分の左胸に手を当てて言い聞かせるように心の中でつぶやいた。
ーーーー大丈夫だ、加藤は川島中佐を桜花と言う形で蘇らせたではないか…アリスだってきっと…
「では、始めましょうか」
ウルの思考をうち破るようにロジャーが声を掛けてきた。ウルは、心の準備が出来た、と言わんばかりに縦に頷いた。
「上手くいけばアリスさんは、亡くなった直前の記憶のまま復活します。彼女の感覚としたら永い眠りから覚めた、という状態でしょう」
ロジャーそう説明すると、普段のお茶目な表情とはほど遠い、稀代の魔術師、と言われるのが納得できるような真剣な眼差しを水槽に向け、両手を前にかかげるとゆっくりと呪文を唱えだした。
「ソレミウス…ソレミウス…ソレミウス…」
その言葉に応じるように月晶石は淡く青白い光を放ちだした。水槽の中は細かい泡が多量に発生し、その泡が徐々に寄り集まりだして形を作りつつあった。その動きを助ける、と言わんばかりに月晶石の輝きが微妙に変わりだし、それに呼応して泡は人型をかたどった。
「…・！！」
人型をした泡が徐々にはじけていくたびに、銀色の揺れる髪が現れだしてきた。そして、現れつつあるのは、髪の毛だけではなかった。目を堅く閉じた女性の姿、すなわち、亡くなったアリス・エリオットの姿が徐々に形作られていきつつあった。

一度形が現れ出すと、彼女の造形を作り出す勢いはますます加速し、首、肩、胸、と形があらわになりつつあった。
ーーーー本当にアリスは黄泉返るのか…しかし…
ウルの内心にわずかな不安が影を落とした。その瞬間、彼の不安に呼応したかのようにピシッ、と言う音が部屋に響いた。
「…月晶石にヒビが…」
ロジャーがつぶやいた途端、一筋のヒビがだんだん大きくなり、石に深く亀裂を作っていった。そして、最後には、パシッ、という音と共に石は粉々になって崩れ落ちた。
「アリスっ！」
ウルの視線の先には、再生途中で止まったままの最愛の女性の姿があった。再生を助けた源であった月晶石が砕け散ったことで、彼女の身体はゆっくりと崩壊し始めていた。その上、死の匂いに釣られたのか、自分では姿形を取ることは出来ない低俗な怨霊とも言えるモノ達がアリスの身体めがけて群がり出しつつあった。
「消えろっ！」
彼女の身体を誰にも触れさせたくないと言う想いからウルは気迫をアリスにたかろうとするモノ達に飛ばした。その瞬間、悪霊達を従え胎内に封じ込めるハーモニークサーの性質故か、ウルの気迫におそれをなしたのか、それらのモノは一瞬にして霧散した。しかし、アリスの身体は彼女にたかっているモノを吹き飛ばしても、崩壊が止まることがなかった。ウルの脳裏に、半年前に味わった恐怖と後悔がよぎった。自分と一緒に居た人間が気がついたら冷たくなり、それが自分自身が原因だったという事が失ってから初めて判明し、ずっと後悔してきていた。その後悔の経験が全く役に立っていない、そして、自分は何も出来ないと言う無力感にウルの目の前が暗くなりかけた。
「ウル…」
不意に聞こえた優しい声に、ウルは慌てて水槽の中のアリスを見つめた。この声は絶対忘れることのない、もう一度是非聞きたかっ

た彼女の声だった。身体は徐々に崩壊していきつつあるにもかかわらず、彼女の表情は、ほほえみの形でうっすらと目を開け、まるで慈悲深い聖女のようだった。

「ア…リ…ス…」

彼女の目が開き、口がゆっくりと動かされたことに、ウルは信じられない、と言わんばかりに目を見開いてじっと彼女を見つめるだけだった。そんな彼に対して、アリスは穏やかな笑みを崩すことなく、再び声を発した。今度は、ウルにはっきり判ってもらえるように、と言わんばかりにゆっくりと。

「ウル…愛しているわ…」

その瞬間、ウルの両目から本人が意識してないうちに一筋、二筋と涙がこぼれ落ちていた。自分のせいで命を落とすことになったのに、こんなふがいない自分に対して『愛している』と言ってくれる彼女の懐の大きさと、どうして彼女が生きているときにウル自身が抱いていた思いをちゃんと彼女に伝えられなかったのか、と言う自分への大きな後悔が涙となって現れていた。ウルは涙目のまま、彼女の言葉にはっきりとした口調で返した。

俺も…と

その答えがアリスの耳に届いたのか、彼女はふわりと微笑み、その笑みのまま泡となって消え去った。その瞬間、ウルはがっくりと膝をつき、彼女が消え去った後の何も残っていない水槽を茫然自失で見つめているだけだった。彼の背後でロジャーが奇跡が起こった、とはしゃいでいるのさえ彼の耳には全く入ってこなかった。

弐章　悪夢

緑の景色が美しい小高い丘の上にウルは一人たたずんでいた。周りには人の気配は全くなく、鳥が鳴く声が遠くに聞こえるだけだった。細かい草がまるで絨毯のように生い茂り、丘の頂上には目印、と言わんばかりに目立つ大きな樹木が立っていた。青々とした葉を付けた樹から漏れる柔らかな光がウルの身体を照らしていた。彼は無言のままじっとある物を見つめていた。それは、小さな白い墓石だった。

アリス・エリオット、という名前の彫られた…

この墓を前にどれだけ後悔して涙を流したか数えようとするだけ無意味だった。もうすでにウルの中の涙は枯れ果て、これからどうしたらいいのか判らない、と言う虚無感しか残っていなかった。

「アリス…お前が死んでしまって俺は一体どうしたらいい…？」

まるで捨てられた子犬のような目でウルは墓に向かって問いかけていた。そのとき、彼の背後から声がかけられた。

「ウル…」

その声は、間違えなくアリスの声だった。ウルは弾かれたように後ろを振り返った。

「アリス…何故…」

木の陰からゆっくりと顔を覗かせたのは亡くなったはずのアリスだった。自分は幻を見ているのか、はたまた白昼夢なのか…

何も言えないままじっと見つめるだけのウルに、アリスは口に手を当て、くすくすと笑いながら言った。

「何故って、貴方が黄泉返らせてくれたんでしょ…エミグレの秘法を使って」

その瞬間、周りの空気ががらっと一転して冷たいものとなった。今まで暖かい光を放っていたはずの太陽の光も、一転して冷たく刺すような痛みすら感じられた。あまりの急激な変化に、自分の背に

冷たい、イヤな汗が流れるのを彼は自覚した。
　不意に、彼はエミグレ文書がバチカンの禁書扱いとなり、アルバートが盗み出すまで封印してあったかを思いだした。たしか、エミグレ文書に記載してある方法を使って復活した人間は…
「貴方の望み通り私は黄泉返ったわ…ほら…」
　そう言うと、アリスはウルの前に全身を晒した。ウルは顔面蒼白で、声も出せずに唇を震わせるだけだった。
　死者を黄泉帰らせる、などという、神を冒涜としか言いようのないことをして大きなしっぺ返しが来るのは過去の例で分かり切っていたはずだった。以前の戦いでロンドンに行ったとき、孤児院に連れ込まれた多数の子供の命を糧にしてジャックがママンを生き返らせようとした時も、クーデルカがロジャーと出会うきっかけとなった、ネメトン修道院での多数の人の命を糧に、暴漢に殺され命を落としたエレインを甦らせようとした時も…
　どちらの結果も、世にもおぞましい、人間というのはほど遠い、知性というモノはかけらもない醜い化け物を現世に出現させるだけだった。
　どうしてそれと同じ事を最愛の女性であるアリスにしてしまったのか…彼女の顔をした醜悪な化け物がゆっくりと迫ってくるのに、彼は声にならない悲鳴を上げた。アリスは猛禽類のような鋭い鈎爪のついた手をウルの方に差し出しながら彼を責めるような強い口調で言い放った。
「何故悲鳴を上げるの…そして…逃げようとするの…？私をこの姿にしたのは貴方じゃない…闇く冷たいところで眠りについていた私を無理矢理起こしたのは貴方よ！」
　その言葉はウルの心にナイフのように突き刺さった。彼に反論の余地は全くなかった。アリスの言っていることはすべて事実であり、自分のエゴだけで彼女をこんな姿にしてしまった…
　ウルはそのままがっくりと座り込み、視線をしたに向けたままだった。彼は消えそうな声で彼女に尋ねた。

「そうだ…アリスがそんな姿になったのは俺のせいだ…俺がどうしたらお前は満足してくれる…？」
　アリスは下半身からまるで蜘蛛のように生えている鋭い足をウルのすぐそばに突き刺した。その風圧で頬に切り傷が入り、血がじわじわとにじみ出した。ウルはゆっくりと顔を上げ、彼女を見つめて口を開くのを待った。
「ウル…」
「ウルっ！」
「ウルさんっ！」
　アリスの声に聞き覚えのある別の声が複数被さった。そして、身体を揺すぶられる感覚に、ウルは今までのことはすべて夢だ、とはっきりと自覚した。彼がゆっくりと目を上げた先には、心配そうな表情でのぞき込むカレンや蔵人をはじめとする、今の戦いを一緒になって戦ってくれている仲間達の姿があった。
「あ…」
　喉がからからになっているのか、かすれた、引っかかったような声しか出てこないウルに、カレンが冷たい水が入ったコップを差し出した。
　ウルは礼もそこそこにひったくるようにそのコップを取ると、一気に中の水を飲み干した。そして、ため息を一つついて、空のコップを横に置いた。
「ウル、貴方すごくうなされていたわよ…大丈夫？」
　カレンの質問にウルは苦笑いと共に返事をした。
「ああ…こんな変な体質だからかな…うなされるのはよくあることだからみんなは気にしなくても大丈夫だ」
　世の中に充満する悪意（マリス）を胎内に封印する性質があるハーモニクサー故、悪夢に襲われやすい、というウルの回答に、彼の従兄弟であり、同じハーモニクサーでもある蔵人は眉をひそめた。
　どうも、ウルの回答がハーモニクサーだ、と言うことを隠れ蓑にして肝心なことをはぐらかしているような気がしたからだった。し

かし、彼がうなされた悪夢の内容を知っているのは彼自身だけであり、彼が自分から口を割らない限りは、周りの人間は心配するだけしか手段はなく、結局どうすることもできないのは、はっきりとした事実だった。
「まだ夜中じゃねーか…悪いな、俺のせいでみんな起こす羽目になっちまったか？」
ウルの明るい声で、仲間達は彼がとりあえずは大丈夫そうだと思い、再び眠りにつくべく、それぞれの布団に潜り込んだ。しかし、肝心のウルは、布団に戻ることなく、すっと立ち上がると、ふすまに向かって歩き出した。
「ウルさん、何処へ？」
未だ心配して訪ねてくる蔵人に、ウルは両手をポケットに入れたまま振り返って言った。
「ちょっと小用。冷たい水は気持ちよかったんだけど身体が冷えちまったからな」
そう言うと、彼はそっとふすまを開け、部屋の外に出ていった。
しかし、小用、と言って出ていったくせに、ウルは夜が明け、朝になるまで戻ってくることはなかった。それからと言うもの、彼は、睡眠時間前になるとふらりと姿を消し、戻ってくるのは朝になってから、という状態を繰り返すようになった。
そんな彼の行動に、仲間達は心配の目を向け、忠告や意見をするのだが、ウルは、判っている、大丈夫だ、の一点張りで全く周りの仲間の意見を聞くことなく、毎夜のごとく姿を消すことをやめることはなかった。
明るい日が射し込む犬神家のテラスで彼等は咲が用意してくれたお茶を飲みながら、ウルが居ないことを良いことに彼の話をしていた。
「どうしたらいいのかしら…このままではウルが潰れてしまうわ…」
カレンはため息と共に、回答を伺うような視線をウルの叔母である咲に向けた。彼女もため息と共に答えた。

「蔵人に頼まれて、遠見で見てみたけど…彼、ずっと風の里の崖の上に座って月を見続けて一夜を明かしていたわ…」
「やっぱり…全く寝てないなんて…どうしたらいいかしら…」
その場にいる者達はため息を繰り返すしかなかった。
ウルは周りが心配しているのを察して、自分のことは気にするなとばかりに、明るい、脳天気なことを言ってくるのだが、目の下に出来たクマと急激に落ちた食欲がそれらの行動を裏切っていた。その状態をあまりにも見かねた蔵人が、男同士、と言うのと血縁だ、と言うのを理由にしてウルから睡眠を拒否する事情を引き出そうとしたのだが彼ははぐらかすだけで絶対に蔵人の質問には答えようとはしなかった。
「どうしたらいいんでしょうか…強制にでも何らかの手段を使って眠らせるべき、でしょうか…」
ため息混じりにつぶやいた蔵人の言葉に、アナスタシアが良いことを思いついたとばかりにぽんと手を叩いていった。
「ほら、ルチア、貴方確か…占いするときに客がリラックスして落ち着けるようにってアロマテラピー使うって言ってたわよね」
「う～ん…たしかにぃ～リラックス効果のあるハーブ類から取ったエキスをブレンドして使うって話したことはあると思うんだけどぉ～それとどう関係があるのぉ？」
ルチアの相変わらずのほほんと言うか、おっとりとした口調に、アナスタシアは机を指でコンコン叩きながらため息と共に言った。
「ルチアって意外と頭の回転鈍いわね～リラックス効果のある香りがあるなら、睡眠を促す香りはないの、と言いたいのよ、私は」
ルチアは暫く考え込んでいたが、いくつか思いついたエッセンシャルオイルがあったようで明るい表情で立ち上がると、彼女等に言った。
「ちょっと待っててねぇ～、いいの思いついたから今から調合して来るからぁ～」
そう言うと、彼女は自分の部屋にいそいそと戻っていった。それ

を見送りながらゼペットがぽつりと尋ねた。
「で、香りをルチアに調合して貰うとして、それをどうやってウルに嗅いで貰うんじゃ？お前さんら女性と違って奴は自らそういうのをつけたがらんぞ」
鋭い指摘に皆はそのまま考え込んでしまった。その時、アナスタシアは皇女には似つかない、黒い笑みを浮かべてヨアヒムの方を見ながら言った。
「こうなったら強制手段としてウルを羽交い締めにして彼の顔にルチアの作った香りをしみこませた布を当てるしかないのかしら…」
「ちょ…ちょっと待つだっち。その視線は、ウルを羽交い締めにする役を俺がする、と言いたいわけだっちか？」
アナスタシアの視線に気がついたヨアヒムが一歩、二歩と引きながら彼女に質問した。尋ねられたアナスタシアはにっこりと笑みを浮かべて縦にうなずいた。
「冗談じゃないだっち…俺がウル押さえ込む、前にぶっ飛ばされるだっち…」
半分涙目で泣き言を言うヨアヒムに、蔵人が助け船を出した。
「じゃあ、代わりに僕がウルさんを押さえ込む役をしますから」
「そんな…駄目ですわ！蔵人様に危険なことをさせるなんてっ」
アナスタシアは蔵人の発言に慌てて反論した。しかし、蔵人は穏やかな笑みを浮かべながらアナスタシアに言った。
「大丈夫ですよ、こう見えても僕の腕力はウルさんよりも強いくらいですから」
「でも…」
心配するアナスタシアに蔵人は大丈夫だ、と言わんばかりに力強く頷いた。そのやりとりにほっとため息をついたヨアヒムにゼペットが皮肉を言った。
「吸血鬼と言う割には役にたたん奴じゃの」
ゼペットの言葉にヨアヒムは自分が吸血鬼だった、と言うことを思い出した。彼はゼペットの腕をおもむろに取ると、ぶんぶんと振

り回して感謝の言葉を述べた。
「さすがゼペットだっち。俺が吸血鬼だったことを忘れていただっち…良い手段を思いついただっち」
「良い手段、ってどんな？」
カレンの問いに、ヨアヒムは胸を反らせて自信満々に答えた。
「俺のドレインだっちでウルを弱らせれば押さえ込みは簡単だっち」
「何でそれを早くに思いつかないのよ」
鋭いつっこみを入れるアナスタシアの背後で力任せに腕を振り回されたゼペットは顔をしかめながら自分の腕をさすっていた。その時、ミュールの足音と共にルチアが部屋に戻ってきた。
「えへへ～完成～今回はかなり気合い入れて作ったから自信作だと思うんだぁ～」
そう言う彼女の手にはガラスの小瓶に入れられた液体があった。ちょっと香りを嗅がせてくれる、と言う女性陣のために、彼女はテスターに小瓶の中身を一滴垂らすと、軽くそれを振った。その行為だけでほんのりと香りが寄ってきた彼女達の周りに広がった。
「これはラベンダーの香りね」
「うん。ラベンダーとカモミールをベースにいろいろ組み合わせてみましたぁ～あんまり嗅ぎすぎると自分が本当に眠くなっちゃうと思うよぉ～」
ルチアはそう言うと、小瓶をカレンに差し出した。彼女はそれを受け取ると、それを蔵人に渡した。蔵人は香水の瓶を大事そうに懐にしまうと、皆を見た。その時、ブランカが外の方を向いて軽くほえた。
「ウルが帰ってきたの？」
カレンの問いかけにブランカはバウッ、と一声ほえて彼女の言葉を肯定した。
「じゃあ、これから決行しましょうか。たぶん今ならウルは全く警戒していないでしょうから」
咲の言葉に仲間達は大きく頷いた。暫くすると、階段を上ってく

る足音がし、ウルが姿を見せた。
「みんなどうしたんだ？こんなところで集まって」
きょとんとした表情で周りを見回し、尋ねるウルにカレンは逆に尋ね返した。
「そう言う貴方は何処に行ってたの？髪の毛濡れているわよ」
その言葉にウルは一瞬、ヤバイ、と言わんばかりに表情がこわばったがそれをすぐに消すと、いつもの軽い口調で言った。
「宿禰の泉で水浴び…気持ちよさそうに見えたからついつい、な」
「気持ちよさそうって…貴方季節判って言ってる？まだ水浴びするには寒いわよっ」
アナスタシアはそう言って顔をしかめた。彼女の指摘通り、いくら日が暖かくなったとはいえ、今はまだ5月であり、山奥である犬神の里の泉の水は刺すような冷たさを未だ保っていた。それを象徴してるのが、ウルの唇の色だった。寒さに血色が悪くなっている唇を見て、そこにいた者達はウルの水浴びの本当の理由を察してため息をついた。
寝ないために水を浴びた、という…
「な、なんでみんなため息ついているんだよ？」
ウルはきょろきょろと周りを見渡して小首を傾げた。その言葉と態度を本気でやっているのか、計算でやっているのか考える気もなくなったアナスタシアはヨアヒムにちらりと視線を走らせた。
「ウル、恨まないで欲しいだっち」
その言葉と同時にヨアヒムの目が金色に光り、ウルにぶつけられた。その瞬間、ウルの身体から力ががくんと抜け落ち、彼は膝をついた。
「ヨアヒム…てめえ…なにしやがる！」
ウルはまるで敵を見るようなきつい視線をヨアヒムに向かって投げかけた。しかし、次の瞬間には、彼は蔵人に背後から羽交い締めにされていた。
「おい、蔵人、お前まで何する気だ！」

首だけ後ろにねじ曲げ、ウルは理不尽なことをされるという怒りにより鮮やかに血の色に近づいた真紅の両目を蔵人に向けた。しかし、蔵人はそれに構うことなく、ヨアヒムがドレインだっちをウルに仕掛ける間に、ルチアから受け取った香水を十分しみこませたハンカチを取り出し、それをウルの鼻と口を覆うようにかぶせた。

「なっ…」

強制的にウルはルチア特製の香水の香りをたっぷりとかがされる羽目になった。全身が倦怠感に襲われ、意識が混濁しつつあった。彼の身体から抵抗する力が抜け落ちたことを察した蔵人はハンカチを彼の口から離した、ウルは頭を振って意識をはっきり保とうとしながら蔵人に尋ねた。

「蔵人…お前一体何をした…」

「これも貴方のためです。ルチアさん特製の睡眠効果の高い香水を貴方にかいでもらいました」

静かな口調でいう蔵人とは対照的にウルは怒りと恐怖が入り混じった表情で彼を睨み付けていった。

「よけいなこと…するな…」

「よけいなことですって！蔵人様になんてこというのっ！」

自分たちの行為を否定するようなウルの発言にアナスタシアは思わず怒りの声を上げた。しかし、ウルは蔵人の腕をまるでおぼれる人間がつかむ命綱のように強い力で握りしめようとしていた。

「…駄目だ…寝ては…取り…こまれて…」

ウルはつぶやき声と共に、蔵人の腕の中で意識を無くした。ウルを抱きかかえなおしながらも、蔵人は先ほどの彼の言葉が気になり、表情が険しくなった。

彼は何に取りこまれる、と言って怯えなければならなかったのか…彼のためによかれと思ってしたことが逆効果になってしまったのではないか…

しかし、その答えを出すものは何もなかった。

参章　鬼門　～1～犬神の里

ウルが強制的に眠らされてから3日目、彼は依然寝たままで全く起きる気配がなかった。それどころか、彼の身体には、誰も何もしていないにも関わらず、一つ、二つと傷が増えていた。

最初に異変に気がついたのは彼の様子を見に行ったカレンだった。ウルが目覚めたときにのどを潤せるように、と冷たい水が入った水差しを持っていった彼女が、ふとウルの顔をのぞき込むと、彼の右頬に、ひっかき傷のような紅い傷が浅く斜めに入っていた。

「あら？寝ている間にウルが爪で引っかけたかしら？」

彼女はそう言うと、ぽつぽつと盛り上がった血のあとを水で湿らせたハンカチで拭った。先ほどとは違う面をもう一度傷口の所に滑らせてみたが、何もついてないのを確認した彼女は、そのことをあまり気にすることなく、部屋をあとにした。

それから数時間後、今度は蔵人が様子を見に行ったとき、彼は寝ているウルを見て表情が険しくなった。布団と服の隙間から見えている彼の肌にいくつもの紅い切り傷のようなものが走っていたからだった。

「これはいったい…誰がこんな事を…」

その時、ウルが眠りに落とされる前につぶやいた言葉が彼の脳裏をよぎった。

――――寝たら取り込まれてしまう…

「ひょっとして、この傷は…ウルさんの精神が何かによって取り込まれて出来ているのでは…だとすると、どうしたら…」

蔵人はウルをじっと見つめたまま考え込んでいた。その時、彼を呼ぶ声と、軽やかな足音が近づいてきた。

「蔵人様、どうなさいました？」

その声と共に入ってきたのは、アナスタシアだった。彼女はウルの顔をのぞき込んであきれた声と共に言った。

「まだ目を覚まさないの？ねぼすけにも程があるわよ、ウル」
そう言って彼の鼻をつまんだが、相手からは全く反応が返ってこなかった。彼女はため息と共に蔵人の方を振り返ると、肩をすくめ、しょうがないわね、と言うジェスチャーと共に言った。
「ここまで深い眠りに陥っているなんて、今まで寝ていない反動がでてるんでしょうかしら。魂はここにあらず、みたいだと思いません？蔵人様」
アナスタシアの言葉に考え込んでいた蔵人ははっと何かを思いついたように顔を上げた。その反応に驚いた彼女は、目を丸くしたまま彼に尋ねた。
「蔵人様…？私、変なこと言いましたか？」
その言葉に、蔵人は慌てて首を横に振ると、アナスタシアの目を見て真剣な面もちで言った。
「いえ、逆です。アナスタシアさんのおかげで何かいいことが思いつきそうです」
真剣な表情で見つめてくる蔵人にアナスタシアは頬を赤らめながら答えた。
「い・・いえ、私の言葉が蔵人様のお役に立てればうれしいですわ」
その時、彼等の鼻に血の匂いがかすかに漂った。顔に緊張感を走らせた蔵人とアナスタシアが振り返った先には、ベッドサイドから垂れ下がったウルの右腕が目に入った。その手の甲には円形の真っ赤になった痕とそこからぽたぽたと血が流れ落ちていた。
「な…なんで…？何時の間に」
「とにかく彼の手から流れ落ちる血を止めないと…アナスタシアさん、救急箱持ってきてくれますか？」
口元を手で押さえたまま動揺が隠しきれないアナスタシアに、蔵人は自分の持っているハンカチでウルの手を押さえながら指示を出した、その言葉で驚愕に金縛り状態になっていたアナスタシアの緊張が解けたのか、彼女は縦に頷くと、慌てて救急箱を取りに廊下を走っていった。その物音に異常事態が起こった、と気がついた仲間

達がウルが寝ている部屋に集まった。アナスタシアから救急箱を受け取ったカレンが、手際よく、ウルの手の甲に包帯を巻いていった。ふと、その傷から連想するものを思いついた彼女は、ウルの左手の甲も見てみた。そこには、右手と同じ円形の真っ赤になった痕とそこから流れる血が布団を汚していた。

「な…なにこれ？何で勝手にウルの身体に傷が増えてるの？」

怯えた表情で言うアナスタシアの質問に答えたのは、博識でもあるゼペットだった・

「これは…聖痕、ではないかのう…カレンも同じ事を思ったからこそ、もう片方の腕を見たんじゃろうて…」

「変ねえ～ウルってキリスト教信者じゃないのに聖痕が出るなんてねぇ～」

小首を傾げるルチアとは対照的に、蔵人と咲は当惑した視線をお互いに交わした。咲はゼペットの方を見ると、彼に聖痕についての説明を求めた。

「日本では、仏教、とかの別の宗教が中心でキリスト教徒はそんなに居なかったのじゃったな…それじゃ、我々西洋人のようにキリスト教が身近ではない分、聖痕という単語になじみが薄かろうて…」

「ええ…日本にキリスト教が入ってきたのは十六世紀のことですし、その後、江戸時代に入ってキリスト教禁止令が出て信者が弾圧された時代が長かったこともあって、日本人の多くはキリスト教独自の言語にはなじみがない、と言ってもいいくらいなんです」

蔵人の言葉に、ゼペットはなるほどな、と頷くと、本格的な話を始める前に、ふと思いついて彼等に質問した。

「聖痕、の説明を始める前に、教会のイエス様の像は見たことはあるかな？」

首を横に振る蔵人と咲に、ゼペットは自分のロザリオを外して彼等に見せ、話を続けた。

「イエス様は我ら人間の罪を一身に背負ってこの像の通り、磔になって命を落とされた。で、聖痕というのは、何もしていないのに、

このイエス様の像の磔にされるときに付けられた傷と同じ場所に傷が現れる現象を指すんじゃよ。ちょうど、今のウルの両手の甲のようにな…」
「原因、は判らないんですか？」
「敬虔なクリスチャンに多くこの現象が現れるということで、自分の心境と聖書に書かれているイエス様が磔にされようとした時の心境とが同調したから出来るともいわれたりすることから、何か精神的なことが聖痕の一因だと言われておるんじゃがな…はっきりとは解明できてないんじゃよ」
「精神的ダメージが肉体に跳ね返る現象、とも取れる訳なんですね」
蔵人の質問にゼペットは肯定の頷きをした。咲は、その言葉を聞いてじっと考え込んでいる蔵人に声をかけた。
「蔵人、何をそんなに考え込んでいるの？何か気になることでもあるの？」
「ええ…ウルさんの精神がダメージを受けているのなら、それを助け出すいい方法は無いものか、と思いまして…」
「揺すって起こせば起きるんじゃないだっちか？」
ヨアヒムの言葉にアナスタシアは首を振って彼の言葉を否定した。
「揺すった程度じゃ起きないわよ～私が鼻つまんでも全く起きなかったんだし、全く身動き、と言うものをしてないようだし」
彼女の言葉にみんなの視線はウルと彼が寝ているベッドに向かった。アナスタシアの指摘通り、ベッドには寝返りとかで出来るしわ、と言うものがほとんど見あたらなかった。
そこにいる人々が口々に変ね、とか言い合っている間、暫く沈黙していた蔵人は、意を決したように顔を上げ、真剣な表情でその場にいるものを見渡していった。
「ウルさんを無理矢理ルチアさんの香水で眠らせたときに、彼は、取り込まれる、と言う表現を使ったんです。それと先ほどアナスタシアさんが、魂ここにあらずみたい、とおっしゃった点からの僕の推測なんですが…ウルさんの精神だけが、切り離された別の場所に

隔離されていてダメージを受けているのにもかかわらず、意識が取り戻せず肉体的ダメージが増えている、と言うのが今の状態だと思うんです」
彼は一息つくと、言葉を区切るようにはっきりと結論をいった。
「つまり、隔離状態を何とか打破することが出来れば彼の意識が取り戻せ、肉体へのダメージもなくなるのでは、と思うんです」
「隔離状態、ってどうやったらウルの心の中に入れるのよ…」
蔵人の発言にアナスタシアはぽつりとつぶやいた。その時、カレンが遠慮がちな声で自分の意見を言った。
「…グレイヴヤードに入れたら…そうすれば彼を助けられるかも…でも…」
否定的な言葉で言葉尻を濁したまま沈黙してしまったカレンに、周りの仲間達はあることを思いだした。
ギョレメの谷と亡くなったヨヴィス司教のことを…
「あの…グレイヴヤードとは一体…」
暗い表情になっているカレン達に、控えめな声がかけられた。その言葉に驚いたのはカレンだった。
「蔵人にはグレイヴヤードはないの？ウルのフュージョンと、貴方の降魔化身術は同じもの、でしょ？」
「確かに、降魔化身術はウルがいうフュージョンと同じもの、なんですけど…その、カレンさん、貴方のいうグレイヴヤード、と言うのがどのようなものか私達に説明していただけるかしら」
カレンの若干攻めるような発言に絶句したまま何も言葉を発せなかった息子の代わりに、そう質問した咲は、その発言のあと、不意に手をぽんと叩いて彼等に提案した。
「雰囲気からかなり込み合った話になりそうですし、ここで立ち話も疲れるでしょうから、隣の応接室でイスに座ってゆっくりと聞かせてもらえるかしら」
彼女はそう言うと、隣に移動し、あとからついてきた皆にイスを提供した。暫くすると、彼女たちの身の回りをしてくれている世話

人の女性が人数分のお茶を持ってきてくれた。そのお茶を一口すすりながら咲はカレンに先ほど中断した話の先を促した

カレンは桜の花びらを浮かせたお茶の表面を見つめながらゆっくりとあのときの情景を思い出していた。彼女は静かな声で話し出した。

「ウルの心の中にいくつもの扉でしきられた場所、と言うのが存在しているんです。そして、その扉の一つ一つに禍々しいものが分散されて封印されている感じで…床には墓標が敷き詰められて、本当に『墓場』という表現がふさわしい場所なんです」

「私にも蔵人にも心の中にそういう場所は存在しないんですが…これはきっとウルが複数の人外のものに化身出来るという特性だからこそ存在しているんでしょうね…」

咲は視線を蔵人にちらりと走らせながらそう言った。蔵人もそれに同意の頷きをすると、カレンに彼女の話で気になったことを質問した。

「ところで、カレンさんはウルさんのグレイヴヤードの情景に詳しいようですが、実際その目で見られたのですか？」

「ええ…ウルにかけられたヤドリギの呪いでフュージョンモンスターが封印され、彼の持つ最強のモンスターであるアモンが最後まで封印が解けなかったから…その封印を解くために、ね」

そう言いながらも彼女の表情はあのときを思いだして暗く沈んだものとなっていた。蔵人の視線から、アモンの封印を解くためにどのような方法を使ったのか、というのを聞きたいのだろう、と察した彼女は、すっかり冷め切ったお茶の入った茶碗を手に取り、口を湿らせると再び重い口を開いた。

「アモンの封印を解くため、私たちはギョレメの谷、と言うところへ行った。そして、そこの聖職者であるヨヴィス司教の力を借りてグレイヴヤードに入っていったのよ…」

「では、そのギョレメの谷、とやらに行き、ヨヴィス司教にお会いできれば…」

蔵人の言葉にカレンは首を横に振った。言いにくそうにしている彼女の横から助け船を出したのはゼペットだった。
「それは無理なんじゃよ…ウルとカレンをグレイヴヤードに導いた代償にヨヴィス司教は亡くなられた…」
彼の言葉を最後にその場は重苦しい空気に包まれた。それを破ったのは咲の言葉だった。
「その、ギョレメの谷、というのはどういう場所なんですか？」
「平和主義者の世捨て人が集う教会と集落があるんじゃよ…争いごとなく、すべての人が平和で幸せに暮らせるように、とずっと祈りを捧げ、助け合いながら皆が生きている場所じゃった…ある種の神々しさが満ちあふれていた場所じゃったよ」
ゼペットの言葉に彼女はうんうん、と頷いていた。彼女はすくっと立ち上がると、使用人を呼んでお茶のお代わりを要求した。程なくして代わりのお茶を配り終えた使用人が部屋を辞したとき、咲はそのまま部屋の扉に手をかけ、残された者達に声をかけた。
「みなさんは暫くそこでお茶を堪能して下さいね。私はちょっと調べたいものがあるので書庫に行きます」
そう言うと、彼女は書庫に向かって歩いていった。残された者達はため息と共に、新しく入れられたお茶に手をかけた。
「お義母様…先ほどの話で何かいいことを思いつかれたのかしら…」
アナスタシアの言葉に、カレンはため息と共に応えた。
「いい方法、だといいんだけど…また、ヨヴィス司教の時のような目に遭うのは私はいやよ…ウルも、だとおもうけど…」
そう言うと彼女はウルが寝ている部屋に視線を走らせた。

参章　鬼門　～2～心の闇

意識を取り戻したウルの目の前にはさび付いた大きな門がそびえ立っていた。彼はそれを見て深いため息をついた。門とその先に続く空間は、彼にとって長年見慣れたおなじみのもの、となっていたからだった。

彼の心の中の世界、グレイヴヤードへ続く門だから。

この門を開けないことには何も話が前に進まないし、現実世界に戻ることすら出来ない、と言うことが十分判っているウルは愚痴とため息と共にさび付いた耳障りな音を立てる扉を開いた。

「蔵人の野郎…よけいなことしやがって…」

そう言いながらウルは、長めの前髪をかき上げた。彼の真紅の視線の先には、色彩の乏しい陰気な空間が広がっていた。正面と左右に古びた扉があり、その中央に存在感を持った巨木が立っていた。この巨木として彼の目の前に立ちはだかっているのがニコルにかけられたヤドリギの呪いの象徴とも言えるものだった。そして、床一面に広がる墓標達とまるで墓守のように立っている巨木という風景は、墓場、と呼ばれるのにふさわしいものだった。

ウルは陰険な空気を振り払うかのようにグレイヴヤード内に数歩足を踏み出した。不意に現実世界との境目である背後の扉がガシャン、と言う音と共に勝手に閉じられた。

その音に振り返ったウルは慌てて扉を叩いた。

「な…なんだよこれっ…何で閉じこめられるんだよっ」

文句を言いながら扉を叩いてもそれからは何の反応もなかった。ウルは腹立ち紛れに扉に一発蹴りを入れると、くるりと振り返ってゆっくりと歩き出した。

「何処の誰が俺を閉じこめようなどと考えているんだ？こうなったら元凶を見つけだして叩きのめす」

彼はゆっくりとヤドリギが変化した巨木の前に立つと、そこから

生えている自分自身を睨み付けた。ヤドリギの呪いによって文字通り人質となっている自分の心の欠片であるその人物は目を閉じ、胸をゆっくりと上下に動かしながらまるで眠っているようだった。その時、空間に漂っていた陰湿な気の質が変わった。

「へへ…向こうからわざわざお出まし、か」

ウルの真紅の両目がすがめられ、エモノを捉えようとする肉食獣のように好戦的な強い光にたたえられた。彼は振り返ると、ゆっくりと辺りを見渡した。その時、現実世界の門とは反対側に位置するウル自身、未だに開けられない扉が奥にある門から一人の人物が出てきた。その人物を見た瞬間、ウルの目が驚愕に見開いた。

「アリス…何故…」

永遠の別れを告げた半年前と全く変わらない姿を保ったまま、アリスはゆっくりとウルの前に歩いていった。彼女はウルの前に立つと、半年前に一緒に旅したときと同じ穏やかな、淡い笑みを浮かべながら声をかけた。

「ウル…」

「…本当に…アリスなのか…？」

震える声でやっとの思いで彼女に問いかけたウルに対して、アリスはこくりと縦に頷いた。その時、ウルの脳裏にエミグレの秘法を使ったあとに毎夜のごとく夢に現れた彼女の姿がよぎった。自分の犯した罪の重さを突きつけられるような彼女の姿を見るのが辛くて寝るのを拒否していた…その彼女と、いま自分の目の前にいる彼女とは違うものかそれとも…

そんなウルの心をまるで読んだかのごとく、アリスは彼のそばに一歩、二歩と近づいた。思わず後ずさったウルの背後にはヤドリギの巨木があり、彼はそれに背を付ける形になった。ウルの逃げ場が亡くなったのが判ると、アリスはそのままウルに抱きついて、未だ青ざめているウルの頬に手をかけた。

「どうして私を見てそんなに怯えているの？私を黄泉帰らせようとしてくれたくらい、愛しているんじゃなかったの？」

「…俺が…よけいなことをしたから…お前の魂はここに取り込まれ、縛られてしまったのか…？」
　ウルはそう言って目を伏せた。彼にとって、アリスの姿は自分の愚かさを責める存在にしか見えなかった。何ものにも代えられないくらい愛していた…だからこそ、自分の命と交換でもいいから彼女に失われた未来を与えたい一心でしたことだった…しかし、それは彼女を目の前にすると、単なるエゴと自己正当化のための言い訳にしかならないことを彼は実感していた。ウルはアリスの手に自分の手を重ねると、聖母のようにほほえむ彼女の目を見ていった。
「なあ…アリス…お前は何を望む？お前のために俺はどうすればいい？」
　それは彼女の時が永久に止まった半年前からウルの中でずっと繰り返されてきた疑問だった。未だに自分の中で答えを出せないその疑問を彼女にぶつけることは卑怯だ、と心の片隅で思っていても、つい、口をついて出てしまった。アリスは少し驚いた表情を浮かべ、そうね…と小首をかしげるとしばらくの沈黙の後口を開いた。
「私のことを永久に愛し続けてくれたらうれしいわ…私がどんな姿形であろうとね」
　その瞬間、アリスを中心に禍々しい空気が一気にウルに押し寄せた。その空気がまるでかまいたちのようにウルの頬をかすめた。頬にぴりっとした痛みが走ったにもかかわらず、ウルはこわばった表情のままアリスを見つめるだけだった。目の前の彼女は人間の身体の構造上ではあり得ない関節の曲げ方をしながら姿を変えていった。みるみるうちに彼女は化け物へと姿を変貌させた。彼女の顔をした化け物は蜘蛛のような鋭い爪をウルに突き立てた。両手の甲を貫かれ、まるで、ヤドリギに囚われているもう一人の自分のようにウルは巨木に縫いつけられた。貫かれた手の甲は激痛を訴えるはずなのに、ウルには全く肉体的痛みは感じられなかった。それよりも心の痛みの方が遙かに大きく彼の中を占めていた。彼はアリスの姿を見ると、そのまま目を伏せ涙をこぼした。

――――アリスをこんな姿に変えてしまったのは俺の責任だ…ならば罪滅ぼしとして彼女が望むことをさせてやるのが俺に出来る精一杯だ…

そんなウルの心情を知ってか知らずか、アリスはウルをまるで小動物をいたぶるように鋭い爪でじわじわとウルの身体を傷つけていった。これが私の愛の証、とウルに囁きながら。

出来るはずの抵抗を一切拒否してアリスのなすがままにされているウルの姿は、まるで、すべての罪をその身に背負い、言い訳も何もせず無抵抗のまま磔にされたキリストのようだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0637x/

幽玄回廊

2012年1月7日01時54分発行